

日本語（母語能力）を活かした英語学習法の開発

—大学一般教育の場合—

中尾佳行

1. 本発表の背景と目的

本発表は、母語と二つ目の言語（英語）がいかに接触し、影響を与え合うか、そのことへの気づきが英語習得にプラスに働くのではないかという、想定に基づいている。この視点に立った主要な研究は Ellis (1994) を始めとした第二言語習得論 (SLA=Second Language Acquisition) である。しかし外国語を研究する場合、常に 2 言語の接触があるわけで、SLA を前面に出さずとも、両言語は必然的に研究対象になる。安藤 (1986) の対照言語学 (Contrastive Linguistics) (音声、統語法、論理構造等の構造的な差異化)、Odlin (1989) や Gass and Selinker (1994) の転移 (Transfer) (母語の特徴が第二言語習得にプラスに影響するか、マイナスに影響するか)、Selinker (1992) の中間言語 (Interlanguage) (第二言語学習者の母語でもなく第二言語でもなく、自律的な中間言語の形成)、池上 (2006) や中村 (2004) の認知言語学 (複数言語の表層構造ではなく、その背後にある認知構造の解明)、齋藤、中村、赤野 (2005) を始めとしたコーパス言語学 (日英語のパラレルコーパスを含む電子化された言語資料と分析) 等がそれである。

これらは異言語接触 (ぶつかり合い・融合) の基礎学的な研究として大きな成果を上げてきている。しかし、異言語間の差異の並列的な提示に、あるいは負の転移は明らかにされても、正の転移が示唆に留まる傾向がある。母語能力を活かして二つ目の言語への気づきを高め、同時に英語の気づきを高めることが、どのように母語を振り返り、その特徴を再構築するか、といった循環的でダイナミックな研究は、必ずしも十分に行われてはいない。これまでに発掘されてきた両言語の原理・原則がいかに日本人学習者に習得され、かくして再生可能なものになるかの臨牀的な研究は、今尚必要であるように思える。

そこで、某私立大学の 2019 年度の一般英語科目、英語 I, II (1 年次生 42 名: 英語プレイスメント・テストで Intermediate), 英語 III, IV (2 年次生 32 名: 英語プレイスメント・テストで Advanced) の受講生を調査協力者とし、上記の学習法を実施した。調査はセクション 2 の研究課題を通して行われた。

2. 研究課題

- 1) 言語コラム課題のコンテンツにより理解度と自信度に違いがあるか。
- 2) 言語コラム課題を通して両言語の気づきは双方向的に高められるか。
- 3) 言語コラム課題の気づきは、他のテキストの理解に応用されるか。
- 4) テキストマイニングを通して気づきの在り方がどのように明らかにされるか。

3. 研究方法

言語コラム課題は、体系的・網羅的ではなく、選択的で、特に発話者の事態把握の仕方に関わる問題を反復的に問うた。課題の題材は文学 (小説、詩)、演説、翻訳等、様々なものから取った。調査を始める前に、言語コラム課題の練習として芭蕉の俳句「古池や蛙飛び込む水の音」(1686) を例に、「英語に直してみよう。英語への気づき、また日本語への気づきを書いてみよう。」を行った。受講生は授業の最初、言語コラム課題をまず解答し、それを口頭で発表、その発表に教師がフィードバック、そして Q・A を行った。トータルで 10 分を使った。受講生は日英語の気づきを振り返り、書き言葉で (できる限りに) 論理的に整理・叙述し、クラウド型教育支援システム manaba (株式会社朝日ネット)、セレッソ (Cerezo) の一つの機能を使って、教師に提出した。データは Excel ファイルで蓄積され、その電子データを基に考察・分析を行った。本発表では 2019 年度前期に行った英語 I と英語 III の言語コラム課題、計 13 回を分析した。

言語コラム課題 1 [2019.4.23]～言語コラム課題 5 [2019.5.28] は下記の通りである。

言語コラム課題 1 [2019.4.23] :

川端康成:『雪国』(1948) の冒頭文について考えてみます。日本語の原典とその英語訳は、視点(誰がどこから事態を捉えているかの)の表し方にどのような違いがあるでしょうか。またそれは何故ですか。

国境の長いトンネルを抜けると、雪国であった。

The train came out of the long tunnel into the snow country. (E. Seidensticker 1996 訳)

言語コラム課題 2 [2019.5.7] :

小学生が次のように英語を言いました。I go to school at eight. 別の小学生が先生に質問しました。8 時は学

校に着く時間ですか。家を出る時間ですか。皆さんはどのようにこの質問に答えますか。

言語コラム課題 3 [2019.5.14] :

英語の前置詞は日本語のどの品詞に対応するだろうか？

[1] 英語に直しなさい：そのこと(the thing)を鉛筆を使って書きなさい。

[2] 日本語に直しなさい：The ship sunk with the loss of a lot of people.

He was standing with his back against the wall.

言語コラム課題 4 [2019.5.21] :

一つの語 (over) には沢山の意味があります。でも何かそれぞれは関係し合っていて共通項があるように思えます。それを指摘しなさい。またそれぞれを日本語に直すとどのようになりますか。

He jumped over the fence.

He stayed in Tokyo over the holiday.

He chatted with her over a cup of coffee.

He thought it over.

言語コラム課題 5 [2019.5.28] :

次の英文は 2016 年 5 月 27 日のオバマ前大統領の広島スピーチです。下記の問いに答えなさい。

Seventy-one years ago, on a bright, cloudless morning, death fell from the sky and the world was changed. A flash of light and a wall of fire destroyed a city and demonstrated that mankind possessed the means to destroy itself.

Why do we come to this place, to Hiroshima? We come to ponder a terrible force unleashed in a not so distant past. We come to mourn the dead, including over 100,000 in Japanese men, women and children; thousands of Koreans; a dozen Americans held prisoner.

[1] 下線部の表現の意味合いについて気づきを述べなさい。

[2] 第二段落では一貫して I ではなく we が使われています。何故でしょうか。

4. 研究課題 2 の検証：言語コラム課題を通して両言語の気づきは双方向的に高められるか（紙面の都合上、まとめは本課題に限定）

ここで求められる力は 2 つある。一つは、授業で学んだ自分の気づきを再生する力、もう一つは、その気づきを論理的にまとめるナラティブ (story telling) の力である。この二つを持続的に行うことで、両言語に対する学習者の感じ方や考え方のメタ認知を促し、某私立大学で目指している学習効果、彼・彼女の思考を深めたり、広げたりする言語力に繋がると期待している。

以下では、言語コラム課題 5 に絞って調査協力者 A、B の気づきを記述する。

英語 I の調査協力者、A の英語プレイズメント・テスト ELPA のスコアは 99。

[1] 多くの犠牲者を出した原子爆弾が空から降ってくるため、このような表現をしたのかと思った。それとは他に fall という単語を使うことで、自然に起こった事のように表現することで人間がやったのではない。というような意味も少なからず含まれているように感じた。

[2] we には世界の皆に原爆の恐ろしさを知ってもらいたいという思いが込められているのではないかと思った。もし「I」の場合この恐ろしい原爆を世界の皆に二度と起こってはならないと伝えきれないと考え、「we」にすることでこの問題は世界の問題だと認知してもらえと思ったから。

A は、日本語が容易には英語に直せないことから、両言語をすり合わせ、双方向的にそれぞれの特徴に気づいていくプロセスが見られた。言語コラム課題のコンテンツが違い、A の気づきの経時的・段階的な変容は精確には捉え難いが、課題をこなすごとに、この学習法に馴染んでいく様子が窺えた。

英語 III の調査協力者、B の英語プレイズメント・テスト ELPA のスコアは 134。

[1] death とは原子爆弾のことを表し、簡潔にそのものが恐ろしいものであることを表し、尚且つ被爆者に対しての配慮をすることであえて直接的に言うのを避けている。ニュアンス的にも思いやりの的にも理にかなった表現であると自分は思いました。

[2] 大統領だけでなく、アメリカ人または、過去の間人達全ての人々が私と同意見を持っていることを表すために we を使用している

B は、語彙・文法及びリーディング力は相当に高く、言語コラム課題の気づきは、ニュアンスまで捉えポイントをついていた。しかし、そのナラティブは多くの場合要約的で、簡単に叙述する傾向が見られた。

5. 結論

研究課題 1：言語コラム課題のコンテンツにより理解度と自信度に違いがあるか。

英語 I、英語 II ともに 2-3、3-3、2-2 の中央値に集まり、その結果は気づきの記述の出来具合の分散につながった。

([1] 理解度：1. よく理解できた、2. 殆ど理解できた、3. なんとも言えない、4. あまり理解できなかった

5. 全く理解できなかった；[2] 自信度：1. 自信がある、2. かなり自信がある、3. なんとも言えない、4. あまり自信がない、5. 全く自信がない) (本まとめでは省略)

研究課題 2：言語コラム課題を通して両言語の気づきは双方向的に高められるか。

調査協力者 A と B を例に、彼らが両言語の特性に気づき、その間を行き来しながらいかに言語理解を深め、広げていったかを紹介した。A は ELPA の試験は 99 であったが、毎回の言語コラム課題に真摯に向き合い、気づきをできる限りに再生し、しかもナラティブも丁寧に行っていた。B は、ELPA は 134 であったが、気づきの再生はポイントをつくものの要約的で、ナラティブも簡潔で短いものが多く見られた。A、B と違った視点からの記述で、両者を補充すると思われる他の調査協力者を追記した。(本まとめでは省略)。

研究課題 3：言語コラム課題の気づきは、他のテキストの理解に応用されるか。

調査協力者 A と B ともに十分に確認できなかった。リーディングテキストを使った授業で、言語コラム課題の気づきを教師が意識的に結び付け、再確認しなかったのが、一因であろう。もっと深刻には、言語コラムの文脈から少し切り離して、抽象化し、他のテキストに広げること自体が、理解度が大きく問われるわけで、直後の応用には至らなかったのであろう。しかし、気づきがきっかけとなって、しばらく後の授業で応用できたり、またこれまでの学習方法のメタ認知にも広がったことは無視できない。(本まとめでは省略)

研究課題 4：テキストマイニング、User Local による分析。

英語 I と英語 III において言語コラム課題 1 の調査結果を可視化することができた。日本語と英語の気づきを分けるキーコンセプト、両言語の近さ、遠さ、そして気づきをまとめる際の思考過程が、凡そではあるが、浮かび上がってきた。例えば、英語 I では十分に見えなかった思考過程(鳥観図的な見立て)が英語 III では見られた。ELPA の示す英語学力の差異が関係したのかもかもしれない。(本まとめでは省略)

気づきの高まりが、即、言語使用に至るわけではない。しかしそれは学習者のモチベーションを高め、自己学習力をアップさせる可能性がある。本学習開発が言語習得に向けての一つのきっかけとなることが期待される。母語を活かした英語学習法がどの程度に効果的であるのか、量的かつ質的に更に調査を広げ、深めていきたいと思っている。

参考文献

安藤貞雄. 1986. 『英語の論理・日本語の論理』東京：大修館書店。

Douglas, Nancy and David Bohlke. 2015. *Reading Explorer 1*. Boston: National Geographic Learning, Cengage.

Ellis, Rod. 1994. *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford/New York: Oxford University Press.

Gass, Susan M. and Larry Selinker. 1994. *Language Transfer in Language Learning*.

Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

池上嘉彦. 2006. 『英語の感覚・日本語の感覚—<ことばの意味>のしくみ』NHK Books [1066] 東京：日本放送協会。

Macintyre, Paul and David Bohlke. 2015. *Reading Explorer 2*. Boston: National Geographic Learning, Cengage.

中村芳久. 2004. 「第 1 章「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」『認知文法論 II』東京：大修館書店、pp. 33-48.

中尾佳行. 2019. 「母語(日本語)を活かした英語学習法の開発—気づきの双方向的な広がりを促す—」『大学教育論叢』第 6 号、福山大学大学教育センター、pp. 125-44.

Odlin, Terence. 1989. *Language Transfer: Cross-linguistic influence in language learning*. Cambridge: Cambridge University Press.

パルバース、ロジャー (Pulvers, Roger)、上杉隼人(翻訳). 2008. 『英語で読み解く賢治の世界(岩波ジュニア新書)』. 東京：岩波書店。

Selinker, Larry. 1992. *Rediscovering Interlanguage*. London: Longman.

白井恭弘. 2008. 『外国語学習の科学—第二言語習得論とは何か』東京：岩波新書。

テキストマイニング、User Local [URL: <https://textmining.userlocal.jp/>] (閲覧日：2020.1.19)